



その六

皮膚

何だか少し寝苦しい。変に蒸し暑い。

そう思ってから、眠りから、浮き上がるように、一寸、覚めかかった。未だ、窓は暗い。夜はまだ明けないようだ。部屋の中は、もっと暗い。部屋の中の空気の蒸し暑さ。体までが、熱があるかと思うほど、皮膚の下から、耐えきれない暑さが湧き上がって来る。しかし、私はまだ、いくらも眠っていないようだ。眠りをさますのは早い。そう思うと、夢うつつの気持ちだが、再び眠りの中に落ちた。

夢を見た。私は河の中で泳いでいる。故郷の河だ。兩岸に石崖が続いている。河の二股の角に、無花果の大きな枝が出ている。安造の家だ。泳ぎもうまくなつたものだ。顔だけ出して、楽に浮いている。手を少し動かせばいい。そうだ。正覚坊の蹠の要領だ。案外早

くすすむものだ。安造の家の裏を過ぎた。どうも具合がよすぎる。いやこれは泳ぎがうまくなつたわけではないらしい。河の流れのせいかな。この辺りは、確かひどく浅い処だが、こうして、流れているぶんには、構わない。長い河藻が、背中から足へかけて、気味悪く、触って行く。陽がカンカン照っている。顔に陽が当る。暑いなあ。一寸、水でぬらせばいいのだが、こうしては、それも出来ない。水の面が、頬のあたりで、ひたひたする。痒い。私は、泳ぐ手で、泳ぐついでに、搔いた。あ、痒い痒い。なるほど、これは痒いや。搔いて見ると判るな。痒い痒い。手も痒いや。ありやあなんだ。虎子おまるじゃあないか。え、汚い。私は驚いて泳ぐのを止めた。今まで私と並んで流れていたらしい虎子は、私が上半身を、河水から出して、突っ立っている前をユラユラ揺れながら、過ぎて行った。待てよ。これは何だ。話か。吉原の火事のおはぐろどぶに飛び込んだ男が、火の子を寄せようと、眼の前に浮いている便器に手をかけたら、中から、エヘンと言ったって、あの話か。そう、そう。俺は夢を見ているのかな。痒い痒い。どうもおかしい。虎子だと？人の顔じゃないか。見たような顔だ。こんな面があるかい。こんな、便器面って面が。そうだ。一膳めし屋の女房だ。道理で……女房は、私に正体を見露みあらわされたので、ただ、流れていたのを止めて、泳ぎ出した。陽の光の眩しく反射する水面の下に、女の白い体がゆらゆらと屈折する。便器は、波頭をたてる。フィン。こいつ泳ぎを知ってやがる。流し場で、釣りをしている男がいる。額のせまった、小さい目の顔は、あれは確か、例の保険屋だ。おでん屋で、何時か、一緒に一杯やったことがあった。その時彼は私に、いいえ、保険なんかすすめませんよ。そんなのよりも、いいお嫁さんをお世話しましょうって言ったっけ。私は、彼の傍にたった。

「こいつを、釣ろうてんですか、貴方は。それじゃあ、餌は大便秘って、寸法でしょうね」
男は、手を挙げて、シートと私を制した。

「静かに。聞こえますよ。だが、この餌が堪りませんや。あとが、痒くてね」

痒いのは、俺もだ。畜生、そのせいかな。そうと知ったら、泳ぐんじゃあなかつた。痒い痒い。

私は、再び目を覚ました。家の中はまだ暗かった。窓も暗かった。私は、一体、どれくらい眠ったのだろう。兎に角一向に窓が白んでいないところを見ると、はじめから私はほんの僅か眠っただけだろう。寝苦しい晩だ。顔が痒い。大分、髯も伸びているから、それで痒いのだろう。それに、この一週間の間、湯に入らない。明日は一つ、湯に入って、顔を剃ってやろう。手も痒い。まるで、顔を搔いたんで、顔の痒みが手に感染したようだ。馬鹿に、蒸し暑い夜だ。電気をつけるのは、よそう。兎に角、眠ろう。すべては明日だ。眠らなければ不可い。

その時の眠さを失いたくなかったので、私は目を閉じて、寝返りを打った。間もなく、家の中の暗さが、私の意識の中から消えると、矢つ張り、陽がカンカン照っていた。人だかりがしている。

「大学病院の院長様の判コが、ペタリと押ししてある」

ははあ、またあの売薬の騙り師だな。怪しげな証明書を出しているのだな。私は、人ごみを掻き分けた。御免よ、押すな、押すな。はいつて見ると、環になった人だかりの真中に、お市馬鹿が、何時ものように、乳母車に乗って、陽に焼けた真黒な顔で、天の一角を睨んでいる。

「なあんだ、お市馬鹿か」

私は思わずそう言うと、あの騙り師が、棍棒を握り返して、

「お市様に向って、無礼なことを言う奴は誰だ!!」

と、こちらを睨んだ。私は棍棒を見て、頭を低くした。私の頭の上を、彼の視線が、撫でて通る。

「みんなああ」と彼は叫ぶ。彼の喉は、せい一杯、ときを作る牡鶏のように、筋張って伸びた。

「折り敷けええッ」

群衆に倣って、私もうずくまった。

「あれんお市様だツちようぜん」

と、私は傍の男に囁くと、その男は、米屋の巳之さんで、巳之さんは、慌てて、私を眼で抑えた。

「シッ。聞えるに」

お市馬鹿は、右手の指を広げて目の上にかざして、しげしげと見る。真つ黒な顔に、三角の白い眼が、鋭く光る。彼女の囁くようにそらした唇から、低い声がもれて来た、御託宣だ。

「つらつらと眺めるに、空の青みは、一層奥深い」

フフン、乙なことを言いやあがる。

「地上の、もろもろの物は、この青みを背景となして、誤りなく、美しく映える」
フム。それから？

「この手を見よ。空の青みに映えるこの手、この指、この五本の美しさの中に、神の営みがある」

フム、フム。

「先ず：：」

先ず？

「この小指は、水じゃ」

お市馬鹿が、こう言うと、騙り師の音頭で、群衆は一斉に唱和した。

「お有難う御座います」

何だ、こ奴らは。堀之内の火葬場の乞食どもか。しかし、それがどうしたってんだ。俺だって、その一人じゃあないか。よし、それじゃあ、もう一遍、おまけにやってやろうか。

「お有難う御座います」

たった一つの私の声は、頓狂に、筒抜けた。笑うない、何が可笑しいんだ。この馬鹿野郎ども。

お市馬鹿は、再びおもむろに言う。

「この薬指は、火じゃ」

それから合唱、

「お有難う御座います」

独唱「この中指は、木じゃ」

合唱「お有難う御座います」

独唱「この人差し指は、土じゃ」

合唱「お有難う御座います」

ここで、お市馬鹿は、つかえた。

「さあ、これじゃ。この親指じゃ。これが判らない。これが判れば、神の退却じゃ。これが判れば、地球は逆転する。好きなほど逆転する。好きなほど逆転する。好きな過去まで、戻ることが出来る。失った青春を再び得ることが出来る。この世の穢れを忌む者には、嬰兒の無垢が与えられる。尚一層望む者は、それ以前にさえも、戻ることが出来る。さあ、これじゃ」

こう言って、お市馬鹿は、右手の親指を、蛇の鎌首のように曲げて、高々と空につきあげながら、半眼に念ずる。乞食どもは、鳴りをひそめて、これを見守る。

「ねえ、貴方」

と、傍の男が、私に向って呟く。

「やあ、保険屋さん」

「ねえ。あの女には判りっこないですよ。女には無いものですからねえ」

お市馬鹿は、カンカン陽に照らされて、額から汗を流しながら念じる。私は気の毒になった。こっちも暑いが、お市馬鹿も、随分暑そうだ。この問題が解けなければ、彼女は、お市様から、再びものお市馬鹿にならなければならないのだ。彼女の黒い顔中から、まるで噴出するように、汗が出る。暑い。堪らない。苦しい。一人の乞食が、堪りかねたように、裸で、跳び上がった。彼は絶叫する。

「遊行寺だッ。遊行寺だッ」

とうとう、暑さに参って、気が狂ったのだ。それを見て、お市馬鹿は、さっと手を振っ

た。——金だよ。金の字だよ——合唱が続いた。

「お有りが……」

現実の世界の何が、この夢の合唱を誘ったのか、「お有難う御座います。」という声をまざまざと耳にしながら、私は急に目が覚めた。覚めたのは、暑苦しくて堪らなかつたからだ。もう陽は随分高くなつたと見えて、障子は眩しいほど明るくなつていた。顔が非常に痒いので、無意識に手で搔こうとして、触れて見て私はギョツとした。顔が腫れ上つている。両頬から顎へかけて、腫れて皮膚が張りに張って固くなっている。

失策しまつた！ 到頭やってしまったか。昨夜いい気になって、ボリボリ搔いたのがまずかつた。手はどうだ。手にも矢張り、小指寄りの甲から掌へかけて腫れ上つている。痒くて堪らなくなつて来た。腫れた中心よりも、腫れ際が痒い。そこを搔けば、腫れが拡がって行くのは勿論だ。そう思うと尚更痒くなる。

「うう」

私は苦しくなつて、飛び起きた。顔がどんなになつたかも心配だ。私は窓を開けておいて、勝手へ行つた。流しの上の棚に、半分剥げかかった鏡がある。私はそれを手に取つて顔を映した。

一体これが自分の顔だろうか。両頬は、毛穴も何もはち切れそうに腫れて、平常の赤ら顔の顔色は、脱色したように白い。何か水のようなものが、皮膚の下から盛り上がつてきたのだ。鼻は見るからに滑稽に悲惨に低くなつている。思い掛けないことには、唇が上下共に恐ろしい程に腫れて、平常なら鼻のわきから口の端へ下りている線が、今は跡かたもなく消え失せている。腫れた口端は、頬からの圧力で自然と開いている。口のその無意味

な穴は、物をいうことも、泣くことも笑うことも忘れたように、人間の表情からかけ離れた、怪奇な洞窟の入り口のような様子になってしまった。その下に、顎が一層固く膨れて、伸びた鬚が、ヘヤーブラッシュの毛のように、拡がって突き出ている。非道いことになった。

一面に腫れて、白く硬張った皮膚では、後悔も悲嘆も何の表情も表れようがない。幾分目尻の上がつた両眼は、何を訴える力もない無表情な目付きで、鏡の中から私を眺めている。此方の意志と共に瞬きこそするが、泣いても叫んでも通じない、私の心とはまるで無関係な表情をしている。これが俺の眼か。俺はこんな怪物になったのか。

「オオオオオ……」

私の喉から、痙攣した声が漏れた。私は鏡を放り出した。俺は泣こうとするのか。馬鹿な。泣いてどうなると言うのだ。馬鹿な。馬鹿な。

私は胸の変に痙攣してくる気持ちを振り切るようにして、寢床に戻った。再び横になった。顔と手を主とした上半身の痒い気持ちは、時々波の押し寄せるような、間歇的な猛烈な山をもって押し寄せて来る。これ以上は掻くことが出来ないという気持ちは、一層痒い気持ちは苛立たせ、助長するのだ。猛烈になって来ると、掻くまいとしてそれに堪えるために歯ざしりをし、四肢を硬直させて私は唸った。

すると突然、その痒みの山が抜ける。ホッとすする。そう思う間もなく、俄かに今度は下の方の足首が痒くなる。そこに今までの上の方の痒みが全部集まってしまったかと思うように、痒みの凝固が出来る。体全体が暑さ以上にほてっていて、もう毒素が全体にみなぎっているようだ。掻けば何処でも吹き出物が、顔や手と同じように出来そうだ。そう考えるとこの足首に出来た痒みの塊を、どうすることも出来ない。掻けないなら、せめて撫で

でもしてみようか、と誘惑が言う。いやいや。撫でたりして見ろ。それこそもう駄目だ。其処の感覚が耐え切れなくなって、爆発してしまうに違いない。私は再び歯を食いしばって耐える。すると、その痒みの塊が一部ほぐれたように解けて、まるで触手を伸ばすように、脛から膝へとソロソロ登って来る。膝から腿の外側を通して、脇腹に差し込んで来る。まるで百足か蜘蛛が這い上がってくるようだ。耐え切れない迫った呼吸が、口を突いて出て、食いしばった歯が開いて顎がガクガク震えて来る。その震えは、顎から、胸から、肩から四肢に伝わって、全身が激しく痙攣する。私は恐ろしい叫び声を挙げて、再び飛び起きた。何かないか。どうかするものはないか。この吹出を治すものでなくても、激しい痒みだけでも止めてくれるものはないか。束の間の紛れでもいい。私は搔くという恐ろしい誘惑をもつ爪をおそれて、両手を前へ固く突き出しながら、室の中を足早にせかせかと歩き回った。

私は硫化カリウムを思い出した。三、四年前に使ったあの壘が、ことによったら行李の中に、古シャツや股引のボロの間にあるかも知れない。使い残しを、用心のためにとっておくという気になって、仕舞っておいたような気がする。私は、三畳の間の押し入れの行李に突進した。行李は、激しい音と、激しい埃を立てて、三畳の間の畳の上に投げ出され、中のボロが蹴散らかすように放り出された。壘はあった。薬は半分ほどはいつていた。私はその青い色の壘を握って立ち上がると、一条の活路を見出したような気持になった。この薬は微温湯に溶かさなければならぬ。そのためには、先ず火を起さなければならぬ。私は夢中で走り回った。勝手から半毀れの七輪を四畳半の前の廊下に運び、新聞紙を丸めて突っ込み、縁下の炭箱から炭を出して、七輪の縁で叩き割り、新聞紙に火をつけて下

から煽ぎ、火が漸く起ったと見るや、バケツを持って行って、井戸から水を汲んできて、洗面器にとつて七輪にかけ、壇から薬を出して、薬の表面が変化してポロポロになっているのを、金槌で叩き落として、これを水が生暖かになるまで待つて、その中へ入れた。白く濁ったぬるま湯が出来た。私はその前に坐つてタオルを入れて、それで顔と手を温罨法おんあんぼうした。

嘗ては、この罨法が、非常な効果をあげたことがあつた。それでこの薬を仕舞つて持つていたのだ。

この吹出ものは、軽いのは時々出来た。手の甲や腕に、ポツンと粟粒のような白い水腫が出来た。何故出来るのか判らない。不潔にしている場合とは限らない。これが非常に痒い。しかし、多くの場合はそれだけで変色して固くなって治つてしまふ。時には二、三粒集まることがある。そうすると痒さが容易に抜けない。そして悪くすると、搔いて大きくすることがある。拡がると、この最初の粟粒の百倍も二百倍もありそんな面積と水腫の量に膨張する。そして皮膚は下から滲み出る水で押し上げられ、殆ど火傷と同じように、身から離れて膨れ上がる。こういう時の痛くて痒い刺激は、堪えられないものがある。それでみすみす悪いと知りながら、搔いたり強く抑えたり、齒でかんだりして、一層悪化させてしまふのだ。

しかしこう悪化するのには、そう度々あることではない。この頃では三、四年に一度ぐらいの割合になつて来ている。

こんな病状が明瞭になつたのは高等学校の時からだ。その時は医者から蕁麻疹と言われた。そしてカルシウムの注射を一本して簡単に治つてしまつた。

その次の時の大学を出る直前に出来たのは、もっとひどかった。この時は主に背中に出て、どんな風になっていたかよくわからなかった。はじめは非常に痒くて、夢中になってシャツの上からガリガリ搔いた。その時期が過ぎると、痒みはやや減少したが、すでに手ではいじれないような吹出が背中一面にでていて、シャツにベタついて気味悪くジクジクした。丁度その頃は、卒業論文を、もう時日が無くなって慌てて書いていたので、夜も昼も参考書のあちこちをひっくりかえしたり、原稿用紙に細字で書き込んだりしていた。だから、こんな不潔な状態で、平常なら痒さや何やで不眠症にかかるどころだったが、それさえも顧みられないで慌てて書いていた。その時、下宿の近所で草津の湯を立てる銭湯があつて、一寸した吹出物にはよく効いた。私は背中が痒くなってから、努めてそこへ行くようにしていたが、吹出が非道くなって背中一面になると、その三助などが露骨にいやな顔を始めた。草津湯の看板はもともと出来物の湯じゃあないか、と腹が立ったが、考えて見れば温泉場じゃあない、東京のど真ん中だ。それに自分の背中の吹出は、それほど非道くなっているのかも知れない。そう思うと腹を立てるよりも心配になった。しかし、もう三、四日だ。論文を書いてしまふまでの辛抱だ。これが終えたら何とかしよう。それにいくら気持が悪くって、痒くて苦しいとは言っても、この塩梅では命に別状はなさそうだ。構うものか。私は、それからは湯にも行かず、寝巻もシャツの上から着るようにして、体の有様は放つたらかした。シャツは滲出液がしみ込んで乾いてゴワゴワに、祭りの鎧ほどに固くなった。背中から離れているとたちまち冷たくなった。くっ着くと、背中に恐ろしく厚い皮が一枚張ったような気持がした。後から後からと滲み出る液体は、外気に触れると固まるらしく、ところどころに瘡蓋かさかたのようなものが張った。それが搔くとシャツ

の間からボロボロ落ちる。寢床から起きる時に見ると、そういう瘡蓋がシーツの上に、充分箒で一掃するほど落ちていた。私は一寸無然とした気持ちでこれを眺め、背中をゆすり上げて、もう少しだと言いきかせて、シーツから畳に払い落とす。そのうちに、下宿の婆さんが、私に出てくれと言いだした。掃除に来て、悟るところがあつたのだろう。私は夢中になって自分にも言い聞かせた。もう少しだ。あと二日……。それから、あと一日。：漸く書き上げると清書もせずに大学へ出して、それが済むと、下宿の荷物を片付けて、友人のところに預け、カバン一つで、友人に教えられた、伊豆の温泉へ駆けつけた。

温泉には行って、はじめてホツとした。やっと、自分の意識に還つたような気がした。冷たい温泉だった。一度浸ると、立上ると寒いので、一寸動けないほどであつた。はいつていると、体からボツボツ泡が立った。体は湯の中で輪郭を紫色にぼかしながら、妙に白く見えた。そういう自分の腕などをじつと眺めていると、本当に助かつたという気持ち心底からして来て、銭湯の三助のことも、下宿の老婆のことも、論文にどんなことを書いたのかも、みんな忘れて、湯槽の縁に頭をもたせかけて、いい心持にウトウトした。

温泉は素晴らしい効き目を出して、三日と経たないうちに、すっかり背中 of 瘡蓋がとれて、湿った気持ち止み、さらつとして気持ちよく乾いた。そのあと僅かの間、治った痕が幾分ヒリヒリしたが、それもすぐとれてしまった。一週間ですっかりよくなって、身も心も改まって東京に戻った。

温泉のこの奏効は、よく考えて見ると、何が良かったのかははっきりしない。温泉湯そのものを普通貴ぶが、果たしてそれが効くものか、よく判らない。温泉地の空気がいいのかも知れないし、私の場合で言えば、そこへ行って生活が変わって良かったのかも知れない。

また、病気がこれから治ろうとしている時に、温泉に飛び込んだのかも知れない。妙にひねくれた言い方だが、数年後に温泉の私に対する効果について、真剣な疑問を起す事態にぶつかっているのです、こんなことをことさら言いたくなるのだ。しかしこの時の私の、温泉に対する感謝は非常なものだった。その即効は神意の如き素晴らしさをもったように見えた。また温泉の威力をもつてすれば、あの帰京の時の爽快さは、二二が四の如く明らかな結果であるように見えた。私はその威力を深く信じ、それからは人との話がそこに行く度毎に、熱心にその点を主張したものである。

あの温泉にさえ行けたらなあ。――七輪にかけて洗面器で罨法しながら、思わずそう呟いた。罨法しても、罨法しても効果はありそうにもなかった。ただ僅かに痒さから気がまぎれるくらいのものであった。勿論それでもよかったが、七輪の火で洗面器がたちまち熱くなってしまうので、何だか顔の患部が一層ほてって来るような気がした。それに、七輪に近寄っていると、体の方が熱くなって汗がにじんでくる。それでなくても、顔と手と同じようになりたがっている胴や脚の皮膚を、一層危険にする惧れがある。それで少し熱くなると洗面器を七輪から下した。それが冷たくなるとまた七輪にかけて。かけたり下ろしたり、私自身も踞んだりうずくまったりした。

二時間あまりして、私はすっかり草臥れてしまった。洗面器や七輪はそのままにして、寢床に横たわった。患部は益々腫れ上ってくるような気がして、気持ちも益々滅入ってきた。これ程になったものが、一日や半日で治るものでないということは、今迄の経験から言ってもよく判ったが、この今の変にいらいらした、せつかな気持ちでは、薬をたとえ一時間でも使ったならば、それだけの効きめが少しでも見えないと、納得出来ないのだっ

た。この種の吹出は、小規模のものなら、あの温泉行の前にもその後でも、時々出来たが、この薬の効めは、私が年をとるにつれて、だんだん薄くなって来るようだった。今だって、まず駄目だろう、と効き目のないことを承知でやったのだ。その癖、実際効能がないと判ると、今更のように事新しく薬をけなして、腹を立てようというのである。――あの温泉へ行けたらなあ――

もっと冷静に具体的に考えて見よう。今このまま温泉に行くとしたらどうだろう。この化物面が、人騒がせもせず、無事に汽車に乗ることが出来るだろうか。それに伊豆だところからは随分遠い。東京で乗り換えなければならぬし、完全に一日の行程だ。その間中、手当もせずに汽車に乗っていることは、恐らく堪えきれないことだろう。何処か近いところで皮膚病にいいところはないだろうか。

他にもっと合理的で、もっと人が賛成してくれる方法がある。それは医者にかかることだ。しかし……いやだなあ、医者は――何故って……何故もくそもない。一体どうして医者にかかるうと言わないのだ。この世で病気に最も理解があるのは医者だ。その上、職業によつてその理解が合理化し確実化されている。病人が第一に相談すべき相手は医者だ。そうさ。勿論それはそうに違いないが……しかし、出来れば……成るべくは……この前あれ程、適面に効いた温泉があるのになあ……。――百姓根性――そうかも知れない。金を出したいんだが、銀行の大きな建物にはいつて、中にいる静かに忙しく立働いている人間や、金網の向方側にいる人間と話しをするのが恥しくて恐い、そういう根性かも知れない。しかし……この世で、病気に最も理解のないのが、医者かも知れない。その上、職業によつて一層その理解が阻まれているかも知れない。だからひよつとすると、病人が第一に相

談すべき相手は、医者じゃあないかも知れない。……こういう病人を扱う医者は、顔や手の吹出よりも、まずその吹出が脳髄を浸した部分から、処置してかからなければならぬだろう。

兎に角いずれにしろ、先ず研究所のフアーテル教授に相談しよう。それに若しどこかの温泉へ行くとしても、また医者にかかるにしても金が要る。出来れば都合して貰おう。私は起き上って、先生に手紙を書いた。そして隣の大家の人を呼んで、手の空いている人に先生のお宅まで持って行ってもらった。

もう何時だろう。懐中時計は止まっている。戸外は残暑の烈しい陽が眼に眩しく照りつけている。十二時頃だろうか。暑い。風がないので、この亜鉛葺とたんふきの小家は中にいると蒸されるようだ。私は玄関までも開けっ放して、着ていた寝巻用の浴衣も脱ぎ捨てて、猿股一つになった。立っていても仕様がな。私は寢床に横たわった。

暫くすると、再びせかせかせした気持ちが出て来た。この収まる気配のすこしもない痒さに、寝ていても仕様がな。温泉へ行くとなったら、顔の腫れだけでも少しは治したい。薬が効かなくなつたが、もつと濃くしたらいいかも知れない。

私はまた起きて、七輪に向つた。新しく炭をつぎ足して、洗面器の薬を濃くした。少し痛いくらいに熱くして罨法をした。液体が濃くなつたので、手やタオルが、黄色に染まつた。罨法を繰り返す。熱すぎて来て洗面器を下す。下して一しきりやる。又、七輪にかける。三十分もして、未だ少しも自分のせかせかせした気持ちが治っていないのに気が付いた。駄目だ。駄目だ。こんなことをしたって、何になる。この薬自身が駄目なのだ。濃いのも薄いのとか、熱いぬるいの問題じゃあない。火のそばにいと他の方まで悪くなる。よそう。

私はタオルを投げ出した。熱くなって湯気の立っている洗面器をそのままにして、寢床に仰向けになった。何か考えよう。何か気を紛らすようなことを考えて、体中に満ちているこの病的な皮膚の敏感さをはぐらそう。映画はどうだ。映画のこととなると、東京へ行きたくなる。女のこと。よそうよそう。こんな時に、女のことなど、馬鹿げている。食い物のこと。そう言えば、俺は、今日はまだ何も食べていない。だが、少しも食欲がない。うまいものが何だ。今の今、食い物に足が生えて、眼の前にやって来てくれない限り、何の意味もないことだ。こんな顔で、何処で飯が食えると言うのだ。

どうしてこんな吹出が出来るのだろう。湯にも大分はいらなかったが、そんなことは毎度のことだ。そればかりが出来る原因とは思えない。或る意味の新陳代謝のないこと。そうかなあ。世の中には、よくそういうことを言う男がいるが、私にはそれが明瞭な原因とは思えない。食い物との関係：：ある、ある。明瞭と思えることがある。昨日の夕食だ。元寺小路の一ぜん飯屋だ。鮪の煮付けだ。

畜生、あいつに違いない。もう後の祭だが腹が立つ。あの時、あの生煮えを食わせたのは何だ。俺のあの倫理的観念だ。吝嗇だ。それじゃあこの吹出の本当の原因は、吝嗇ということになるじゃあないか。それならすでに、これは精神からして吹出物の出来ている、立派な証拠だ。

吝嗇——フロイド学者は、吝嗇は肛門感覚と関係があるという。肛門感覚か——それで思い出したことがある。私の腸の異常なことだ。非常な下痢症だ。これは昨日食った鮪の煮付と同じ程度に、吹出の方の重要な原因ではないだろうか。この下痢は、腹が異常に刺激され易いのか、機能が弱くて消化不良を起こし易いのかに違いない。そういう刺激され

易い腸が、魚の一寸変わったものに、すぐやられるのだろう。私は幼いころからそうだったらしい。母がよく言っていた。私は、他の兄弟がなんとも思わないような魚にも、当たって体が赤くなるのが少なくなかったそう。そう。そう。この腸が大分問題だ。：：いや、待て。一寸判らないことがある。フロイド派の吝嗇と肛門感覚の関係というのは、一体どういうことなのだ。肛門の排泄は、Penisにへの恐怖と同じようなものを抱かせるというのか。その排泄嫌悪が、吝嗇の根底となる、のか。それならば、吝嗇家は便秘症でなければならぬだろう。ところが俺はどうだ。俺の吝嗇は否定すべくもないが、俺は大変な下痢症だ。性質として吝嗇がドミナントなら、便秘を好むべきだ。下痢がドミナントなら、浪費的である筈だ。この背反はどう説明されるのだ。：：そうか、判った。なるほどこれだ。自分が下らないことに金を使って、ことさらに貧乏を作っておいて、その後で吝嗇をして手段を振るわせていい気持ちになっているという、変な矛盾は、ここから来ているのだ。：：人は言う「便秘と下痢とは、同じ原因によることがある」とすると、俺の下痢は実は便秘と同じ性質のものなのか。肛門感覚的にもか。：：何だか、よく判らない。ところで便秘と言うが、俺はこの頃便所へ行ったか。どうもこの二三日行かないようだ。昨日は確に行かなかった。下痢症の自分には珍しいことだ。矢張り、便秘的痕跡ぐらひはあると見える。一昨日は？行ったような気もするし、行かない気もする。兎に角、この一日乃至は二日、便秘したことは、自分としては相当な変調である。これも、吹出の原因になる。原因がいくつもあるなあ。一体そのうちのどれなんだ。それともみんな固まって原因となっているのか。それとも俺には、未だ考えられない他の原：：：不意に、玄関に足音がした。私は驚いて起き上がった。開けたままになっていた玄関に、

果然として突っ立っているのはファーター先生の夫人だった。私の怪物的変化に、驚きの余り、頓にわかに口もきけないでいるようだった。

「まあ、どうしたんですか」

どうしたんですかって、夫人をこのように驚かせた姿は、この通りであるが、私には即座にこうしたんです、という返事が出来なかった。余りにもこの通りであり過ぎる。返事にも何もなりはしない。兎に角裸でいては失礼だ。私は慌てて寝巻でない方の浴衣を着て、玄関の夫人に対した。夫人は、すぐこれから、皮膚科の伊原先生のところへ行きましょう、と言った。これは多分、私の手紙に対するファーター先生の返事だろう。私は、温泉行きを諦めて、それに従った。考えて見れば、そうなるのが当り前だ。これから温泉へ行くなどは、馬鹿げている。馬鹿げている。

戸外へ出ると、乾いた埃の上の午後の陽のキラキラした強い照り返しに、思わずふらふらとした。私は自分が相当に疲労していることを知った。首すじに陽が当たると、たちまち汗ばんで来た。身の内の変に熱いのが再び思い出され、蒸し蒸しするようにはてった。時々、自分の下駄の音が聞こえなくなるように、耳が遠くなった。ふらふらしていた証拠かも知れない。

伊原先生の宅へ行くと、日曜で幸い丁度先生は家にいた。応接間に腰掛けていると、奥の方から、黒い眼鏡を手に持ったまま、眼をパチパチさせて先生が出て来た。先生の視線は鋭く私の顔を射た。私は卑屈に微笑んだ。何故こういう眼光の下にこういう卑屈な微笑みが浮かぶのだろう、自分にも判らない。しかし勿論この卑屈な笑いは、この時恐らく先生も誰も気が付かなかつたろう。この微笑みは皮膚の下で起こっただけで、表面では怪物

面が無表情に、一寸きしんだくらいのものであったろう。

「やあ、何か付けたね。それは外からやられたもんだねえ。硫化カリウム？濃すぎた？
フム…：ねえ…：顔と手と…：体には出来ていないようだね。鮪？いけないねえ。…：遠くから見た時は、丹毒かとおもったが、非道くやられたねえ…：」

傍からファートル夫人が言い添える。

「私も、丹毒かと思つて吃驚したんでございますよ」

話は簡単に済んだ。伊原先生は病院に電話をかけて、当直の医師に何か指図した。私は先生とファートル夫人にお礼を言つて、別れて病院に向つた。

病院ではこの四月に大学を卒業したばかりのような、若い医師が私を迎えた。彼は、科長の命令を、まるで憲法でも暗誦するように口の中でくり返しながら、看護婦に言いつけて薬や包帯や、油紙や、氷などを用意した。私は黙つて黒い皮の張つてある汚い丸椅子に腰かけて、エーと、と言つて口の中で呟いては、用意にあちこちする彼を眼で追つた。恐らく極めて簡単な命令だろうが、それがこのように慎重に遵守じゅんしゅされることから、私は科長の威信やこの若い医師の人となりなどを、呆んやり考えた。二十五六歳の相当に経験のありそうな看護婦が、慎ましいうちに母親が子供を見る時のような目付きをしながら、彼に従つていた。

机の上には、看護婦の手で顔に当てるマスクが出来上がった。ガーゼと油紙と包帯代りの綿布との三重のマスクで、眼の穴が二つ、鼻の穴が三角に一つ、口の穴が横に一つ、都合四つの穴があいている。医師は、私の顔に白いドロリとした薬を塗つて、その上に傍の白い洗面器様の皿の中の冷硼酸水に浸したガーゼを当てた。看護婦が寄つて来て、そのガ

ーゼの位置を、眼鼻の具合に直した。それから油紙を当て、その上から木綿布を当てた。さつき用意する時、看護婦はガーゼや油紙と、それから私の顔を見比べるながら、いきなりジョッキジョッキ鉢を入れたが、こうして当てて見ると、位置を直せば大して穴が狂わない程度にうまく出来ている。でも三重のマスクを私の顔の造作に合わせて揃えるのは、面倒なことに違いはない。看護婦は顔を近付けて一心に穴の具合を直した。生暖かい息が、私の鼻や口にかかった。女の臭いはしなかった。私もそれどころではなかった。私はこのマスクをしたあとの姿を想像して、一層気が滅入っていた。マスクの上から動かないように包帯をした。両手も同じような順序で手当てをした。両手の出来上がりは、白い拳闘グローヴのようであった。

出来上がると、ついでに着物の前も看護婦に一寸引張ってもらって、私は医師と看護婦にお礼を言って、その皮膚科の処置室を出た。

病院から外へ出ると、もう陽は大分かげっていた。北の国の暑さは、昼日中は案外な暑さでも、それが過ぎると流石にすぐ凌ぎよくなる。私は病院から家が余り遠くなかったのので、歩いて戻った。マスクは三重のせいで大分厚みがあって、眼のすぐ前に窓が一つ開いているような感じがして、視角が非道く狭くなった。歩いて行く道の向方だけ見えて、側が見えないので、顔の上に如何にも厚ぼったい覆いが出来ているのを意識した。歩くにも何だか少し足が心もとないような気がした。それで判ったことだが、普段健康時には、外気に直接さらしている顔全体の感覚が、歩く時の体全体の調子を取る上に、可成り重要なことだった。こうして歩くと、どうしても少しふらふらするようだった。道ですれ違って行く奴には、私の姿に気がついて、肝をつぶしたような顔をして行くものも大分いた。

田舎の人間らしく、吃驚して眼口をはだけて、不躰に私をしげしげと眺めて行くのだった。私は行き過ぎながら、何時までも彼等の視線を感じるような思いがした。

家へ着いた。昼間、出たきりになっている家の中は、平常の倍も乱雑を極めていた。私は足を踏み入れたまま一寸の間、流石に坐る気持ちにもなれず、呆んやりと立っていた。

兎に角、片はついた。実際の肉体的変化は、外見上はマスクで覆われた。そのマスクは一層怪物じみたものになったらしいが、なるほど、あの居ても立ってもいられないような痒さは、これで非常に緩和されている。この効果は疑うべくもない事実だ。皮膚から来る焦慮は、これで一応片がついた。さて：私は恐ろしく腹が減っていることに気がついた。朝から、一口の食物も一滴の水も呑んでいないのだ。だがその前に、辺りを少し片付けたと思った。私は両手を眺めて弱ってしまった。拳闘のグローヴのような手では、何も掴むことが出来ない。それでも少しばかり出来ることをやってみた。七輪の上の洗面器は、殆ど中の水が乾いていたので、それを両手に挟んで持ち上げて、七輪は足で廊下の隅に押ししてやった。寢床の上の掻巻きを隅の方へ蹴飛ばして、座敷の上の紙屑の二三を足で廊下の方へ蹴った。出来たのはそれくらいだった。またすぐこんなことをしても仕様がないうち思って、それ以上試みようという気持が無くなってしまった。

だが、飯をどうしよう。私は決心して大家へ出掛けた。大家とはこの二、三ヶ月来、家賃滞納のことで決裂していた。しかし、こうなればもう大家に頼むより外はない。大家の茶の間では夕飯がはじまっていた。私が裏口からはいつて行って、茶の間の窓の前に立つと、大家の小さい娘達は悲鳴を挙げて、食器を放り出して奥へ逃げ出した。私も不用意なことをしたと思ったが、そうかと言って他にどうすることも出来なかった。私は眼を見張

っている大家の夫婦に、今朝からのことを話した。好人物の夫婦は、忽ち、非常に同情してくれた。実は私が今朝手紙を頼んだ時から心配していたのだった。夫婦はそれまでのことを忘れて、私の依頼をきいてくれた。

それから三十分して、私の座敷はざっとした掃除ができ、寢床の前には大家から用意してくれた膳が拵こしらえられた。用意が出来て出て行く大家の主婦に私はお礼を言つて、寢床の上に上がった。戸外は薄暗くなって来た。私はああやと用意が出来たと思ひ、その夕暮の暗さに気が付くと、腹が物凄く減つて来た。精神的な打撃以外には、食い気の方に故障はない筈だった。私は膳の前に寄つた。油物や肉類は吹出によくないので、私の注文で、料理はそれ等を抜きにした、有り合わせの物が膳に並べてあつた。大根の煮たのと露のゆでたのと香の物であつた。飯は井に入れてあつた。台所に私の茶碗や箸があつたが、それを言い忘れたので、黄色い塗り箸まで付けてあつた。精進の料理にも関らず、私はもう我慢が出来なくなつて、喉が痛いような音を立てて鳴つた。私は膝を進めて箸を取ろうとした。

その時、再び私は自分の両手に気が付いた。この、指も何も判らないように、ぐるぐる巻きにしてある手で、何が握れるだろうか。握るどころか、この膳の隅にある箸を、拾い上げることさえ容易でない。両手を使って、一本を挟み上げたところで、何が出来よう。私は唸つた。このように食い物を眼の前にながら、未だ私の飢えは満たされないと云うのか。浅い皿にスープを盛つてだされた鶴。深い壺の底に料理を入れて出された狐。そのお伽噺は一体この私を廻なぶるために作られたのか。夕暮の暗さは益々近寄つて来た。庭先の雑草の緑の鮮やかさも、次第に消えて行つた。それはまるで、私のますます強くなつて行

く空腹の度合いを表しているようなものだった。大家が用意してくれたと言っても、まさか食べることで、三ツ子のように頼むわけには行かない。こうしては、何時まで経っても食えない。喉はまた、乾いた大きな音を立てた。何とか方法を見付けなければならぬ。私は頭を火のように熱くして、その方法を探して求めた。たちまち私は見付けた。飢餓の靈感だ。私は箸の一本を両手で苦勞して挟み上げて、あぐらをかいている左足の親指に挟んだ。汚いなどとは言っていられない。それから、もう一本も同じようにして、そこに挟んだ。これを、右手の、親指と人差し指の上に当たるあたりに、包帯の間に揃えて刺した。それでどうやら、箸を持っている格好に近いところまで、漕ぎつけることが出来た。私はそれから、井を抱え上げて、左の腕で胸に抱え込んだ。さあ、これで食べる。私は、右手の箸を井の飯の中へ突き刺した。そして上へこじあげた。なにがしかの飯粒が漸く箸の上ののつた。これを見て私の喉はこの食物のはいつて来る期待に躍り上がった。私は口を大きく開けて、箸の上に危なげにのっている飯を持って行った。私の口は恐ろしいほど激しい期待に震えて、大口あけて待ったにも関わらず、箸の先は包帯につかえて、ぐいと横にねじれた。飯は忽ち膝から下へこぼれ散った。私の口からは思わず呪いの叫びが迸った。私はそのとき、マスクの下で出来るだけ大きな口を開けたにも拘わらず、マスクには、皮肉にも微笑している口許のように、横に細長い切り口が出来ているきりだった。夕闇の中に、点々として白くこぼれ散っている飯粒をみていると、何だかこれが自分の涙のような気がして来た。すると、急に言いようのない悲しさがこみ上げて来て、私は井を投げ出すと、おいおい声を挙げて、泣き出した。

147	146	145	136	131
頁	頁	頁	頁	頁
ドミナント	フロイド	フアーテル	遊行寺	正覚坊
：支配的であること。	：ドイツの精神分析学者	：（勤めている研究所の）の親父、親分である教授。	：踊念仏の一遍上人を祖とするお寺。	：アオウミガメの別称。